

瀬戸内オーシャンズ X の取組み ～連載第6回～



瀬戸内
オーシャンズ X

瀬戸内オーシャンズ X 推進協議会事務局
大 林 優 花

1. はじめに

瀬戸内オーシャンズ X (日本財団と瀬戸内4県(岡山県、広島県、香川県、愛媛県)による海洋ごみ対策プロジェクト)は、2025 年までに瀬戸内海への新たなごみの流入を 70%減らし、回収量を 10%以上増やすことを目標とし、瀬戸内海の海洋ごみの全体量を減少傾向に転じて問題解決へつなげていくことを目指して発足しました。本誌では、集中連載として 2022.No.83 から瀬戸内オーシャンズ X の取組みを紹介しています。

2. 日本財団会長・4 県知事の初のトップ会合

2024 年 4 月 15 日、東京都港区の日本財団ビルにて、日本財団会長と岡山県、広島県、香川県、愛媛県の知事によるトップ会合が開催されました。コロナ禍の只中であったプロジェクト発足から三年余りを経て、対面でのトップ会合は念願の初開催です。プロジェクトの進捗状況や成果を振り返り、今後の展開を検討した結果、新たな目標を設定し、目標達成に向けて実施期間を延長することが合意されました。海ごみ問題に力を入れて取り組んでいきたい、瀬戸内海を世界で一番美しい海にしたいという熱い思いは、会長と各県知事が顔を合わせて意見を交わすことで、より一層強く共有されたように思います。今回は、この会合で確認されたこれまでのプロジェクトの取組みの成果と、今後の新しい目標と方針についてご紹介します。



写真1 調印式の様子

〔写真左より:伊原木 隆太(岡山県知事)、湯崎 英彦(広島県知事)、笹川 陽平(日本財団会長)、池田 豊人(香川県知事)、中村 時広(愛媛県知事)〕

3. これまでの取組みの成果

瀬戸内オーシャンズ X は、①調査研究、②企業・地域連携、③啓発・教育・行動、④政策形成という四つの柱を設定し、約五年をかけて瀬戸内海のごみを減少に転じさせること、またそれを“瀬戸内モデル”として世界に発信することを目指して始めました。

①調査研究では、まず 2022.No.83 でご紹介した、瀬戸内 4 県における河川流域での大規模調査を行いました。これにより、陸から海に流出するごみの発生原因やホットスポット、発生量等が明確になりました。また底引網や AUV(自律型無人潜水機)を用いて海底ごみの実態把握調査を行い、これまで実態が明らかとなっていなかった海底のごみの状態を把握し、回収対策や流出防止対策を推進しました。ここ最近の成果としては、日本財団や国、自治体などが保有している情報を基に、瀬戸内 4 県におけるプラスチック

ごみの年間の流入・発生量が約 388 トンであること、そのうち約 328 トンが回収されており、この差の約 60 トンが回収できずに毎年海洋ごみとして瀬戸内海に蓄積していることを明らかにしました。これにより、これまで取りきれていなかったごみの量、つまりこれから海洋ごみを削減していくために回収すべき量を把握することができました。

②企業・地域連携では、岡山県笹ヶ瀬川河口部の散乱ごみ一掃(2022.No.84 にてご紹介)をはじめ、愛媛県宇和島市や広島県阿多田島での漁業大型ごみ一掃(ともに 2023.No.86 にてご紹介)、香川県大東川の河岸ごみ一掃など、各県の接近が困難なエリアにおいて、地元の自治体や団体と連携して多くのごみを回収しました。離島や半島先端部、河口沿い、河口といった、ごみの回収や運搬が難しいエリアで、状況に応じて効率的にごみを一掃する手法を確立しました。またコンビニ店舗にインセンティブ付与型の PET ボトル回収機を設置し、リサイクル推進や使用済みプラスチックの資源循環スキームを構築しました。



写真2 漁業大型ごみ回収の様子

左:大量のフロート 右:減容機によってフロートを圧縮

③啓発・教育・行動では海の近くに範囲を限定することなく、全ての住民を対象に、様々な催しやイベントの開催、学校教育、スタディツアー、テレビ CM の放映などを実施しました。また、日本財団が制作した「海をたすけるもたらう」の絵本を活用した小学校での特別授業や、水族館での展示イベントも行いました。こうした啓発によって瀬戸内オーシャンズ X の認知度が向上し、活動団体間の連携も生まれてきました。さらに、2023.No.85 でご紹介した瀬戸内海洋ごみ削減行動促進・支援基金により、戦略的な清掃活動、地域人材の育成、資源循環スキーム創出などを助成し、実施された事業の拡大や、その事業を地域に根付かせる支援を行いました。

④政策形成については、延長期間も含め、今後検討を進めることとしております。またそのためには、課題に対して各県が共通の認識をもって取り組む必要があります。これまでに、岡山ではボランティア清掃に伴って生じたごみの運搬・処分費の県負担、広島では県の部局と漁協の連携による事業形成、香川ではかがわ海ごみリーダーを中心とした県民主体の清掃活動の推進、愛媛では海洋ごみ対策専門の係を設ける市の出現など、各県ごとの課題に沿って実施した本プロジェクトの取組みをそれぞれの自治体がサポートしており、官民連携の持続可能な取り組みとして定着を図ってきました。

4. 今後の新しい目標と方針

調査の結果、増え続ける海洋ごみを削減するためには、これまでの回収量に加えて年間 60 トンの回収が必要であることが分かりました。瀬戸内オーシャンズ X のこれまでの平均年間回収量は 26 トンであるため、合わせて年間 86 トンを毎年継続して回収し、海洋ごみを減少に転じさせることを新たな目標としました。またこの目標を達成するために、今後の方針として、三つのポイントを設定しました。

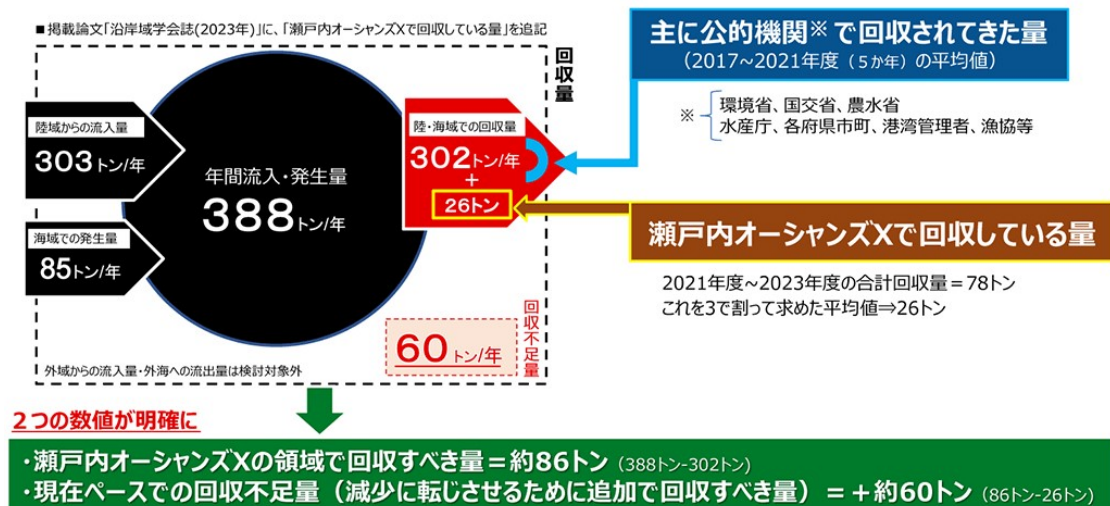


図1 4県における海洋ごみの現状

一つ目は、各県ごとの課題に対するリソースの投下です。効率的なごみの回収を行い、またその担い手を育成するためには、それぞれの状況に応じた対策が必要です。例えばホットスポットのごみを一気に回収するためには、実証事業を通して担い手となるプロボノを育成しなければなりませんし、継続的なごみ回収を行うためには、担い手である市民が活動を続けやすくなる仕組みや体制を構築しなければなりません。また、漁業系ごみの対策や、生活系散乱ごみの対策を行うことにより、発生抑制や資源循環といった、回収だけにとどまらない取り組みも進めます。

二つ目は、プロジェクトの期間延長です。当初、本プロジェクトは 2025 年 3 月に終了予定でしたが、新たな目標達成に向けて 2028 年 3 月まで三年間の延長を行うことが決まりました。

最後に、清掃活動にヤマ場を設定するということです。2025 年の夏に4県合同の大規模清掃を実施することが決定しました。会合中、日本財団会長や各県の知事がそれぞれ海ごみ対策にかける熱い思いを語り、満場一致での合意となりました。

今後は新しい目標である年間 86 トンの回収および海洋ごみの減少を達成できるよう、延長された期間でさらに力を入れて海洋ごみ問題の解決に取り組んでまいります。

香川県・東京藝術大学連携事業 「瀬戸内海分校プロジェクト」

香川県政策部文化芸術局文化振興課 主事
河野 風花

1. はじめに

香川県・東京藝術大学連携事業「瀬戸内海分校プロジェクト」は、「海は人を愛する」をメインテーマに、令和4年度に始動したアートプロジェクトである。東京藝術大学が派遣する国内外の第一線で活躍中のアーティストと、公募で集まった香川県内の中学生・高校生らがチームを組み、フィールドワークや作品制作、展覧会の準備・開催をともに行うことで、子どもたちに作品の企画立案から展覧会開催に至るまでの一連の流れを実践的に学んでもらう人材育成のプログラムである。

のびのびとした自由な雰囲気の中で、アーティストと中高生による独創的な作品制作が行われる本事業を、これまでの活動をもとにご紹介する。

2. 事業概要と目的

本プロジェクトは、香川県民の文化芸術に触れる機会の充実等を目的に始まった東京藝術大学との連携事業を重ねる中で、県内若手芸術家等将来の芸術に関わる人材育成にも、より力を入れてはどうか、との東京藝術大学日比野学長の提案から事業化されたものである。

主な対象は県内の中高生で、美術展に展示される作品をアーティストはどのように企画し、どう創り上げ、表現するのかなどの全プロセスをアーティストとともに活動することで実践的に学ぶことができる。なお、実施内容は「作品の企画」、「制作」、「展覧会の開催」の大きく3段階に分け事業を進めている（図1）。

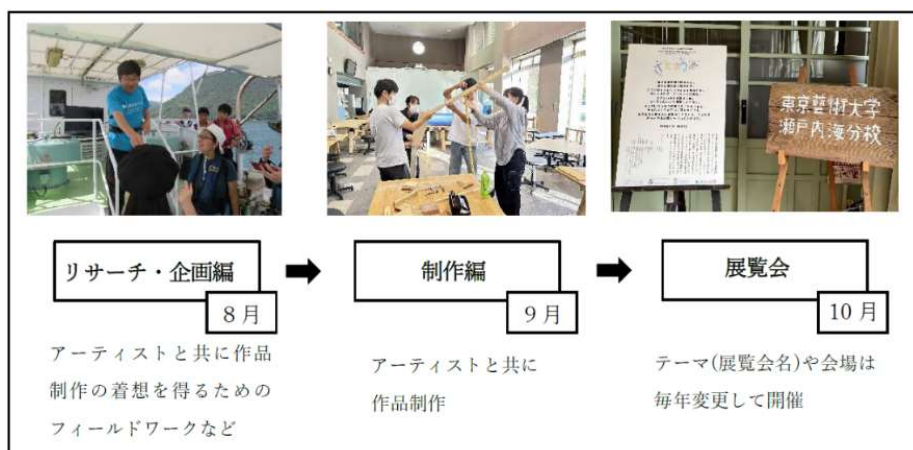


図1 本プロジェクトの流れ

海洋環境を想う「海は人を愛する」というメインテーマのもと、初年度は「さとろうみ」、令和5年度は「くらしろうみ」をそれぞれサブテーマとし、瀬戸内海とそこに暮らす人々やその生活に焦点を当てた展覧会を開催してきた。

東京藝術大学の「香川分校」ではなく「瀬戸内海分校」と呼ぶことに意味があり、県内の子どもたちの人材育成を目指しつつも、瀬戸内海と「〇〇」という広い着眼点で、アートの視点から郷土文化や環境への理解を深めてもらうことを目的としている。

3. リサーチ・企画編

さて、展覧会で展示する作品の方向性が決まるのが、プロジェクトの最初のステージとして8月に連続5日間の日程で開催するリサーチ・企画編である。

本編は展覧会に向けた作品の構想を練るため、アーティストと公募で集まった中高生がチームになって、海洋に関する講義を受講し、県内各所でのフィールドワークを行う。1チーム10人ほどで、その内訳はアーティスト1人に対して中高生が6人ほど、そこに運営のサポーターとして香川大学創造工学部の学生が2人ほど入る。

5日間の行程は、前半2日間で瀬戸内海にまつわる講義を受講し、3日目と4日目にはチーム別のフィールドワークで理解を深め作品制作のプランニングを行う。そして最終日には、チーム順に、体験や作品コンセプトの発表を行うという流れになっている。最終日の発表会は、東京藝大の日比野学長にも出席いただき直接講評いただいております、アーティストも参加生徒も双方に期待と緊張が入り混じる瞬間となっている。過去2回の活動の様子は図2のとおりである。



図2 リサーチ・企画編の活動の様子

前半2日間の全体講義では、香川大学の創造工学部や農学部の方のご協力のもと、同大学所有の調査船に乗船しての海洋調査をはじめ、水中ドローンを用いた藻場の観察や地質学にまつわる講義といった専門的な内容に触れさせていただいた。普段の学校生活ではまず目にする事のない海中の様子を見た際には、歓声が上がるなど大変盛り上がった。

また、令和5年度のチーム別活動では、離島に残る「両墓制」の^{ししじま}リサーチのため、志々島（三豊市）や本島（丸亀市）へ渡ったり、全体講義で学んだ「大昔の瀬戸内海は陸地だった」ことの検証などで地表部分にサヌカイト（讃岐岩）が多く見られる坂出市の山に登ったりと、精力的に活動した。

参加した中高生からは「最初は緊張するけど、終わった時の達成感、充実感がとてもいい！」や「外で活動することが好きな人や自然と触れ合いたい人など、芸術に興味がある人にもない人にもおすすめ！」といった声があがるほか、活動中に小声で「普段はあまり外に出ないから疲れた。」とこぼす参加者にとっても、刺激的な夏休みになったようだった。

4. 制作編

次のステージである制作編は、リサーチ・企画編でアーティストと中高生が練り上げた作品コンセプトをもとに、実際に作品を創り上げる段階となる。参加者の対象範囲を大幅に広げ、リサーチ・企画編の参加生徒に加え、おおむね小学校3年生以上の県民に参加いただいている。参加者の年齢層が広がることから、より多くの方が東京藝大の真髄に触れながら作品制作に携わることができるプロセスである。

令和5年度には、デジタルカメラ全盛の今日では珍しい、感光から現像液を用いた現像までの行程を暗室作業で本格的に体験する「写真・インスタレーション分野」のワークショップや、電動のこぎりやタッカーを用いた木工作業に取り組んだチームもあった。今回初めて触る道具でも、ワークショップ最終日にはお互いに作業内容の声掛けをしながら手慣れた様子で扱う参加者の様子を見て、アーティストが喜んでいただいていたのが印象的だった。

また、展示会場での設営作業までをワークショップとして実施したチームでは、展示用に目立たずほどこにくいテグスの結び方や水平器を用いた展示作品の調整方法などをアーティストから学んだ。「地味だけど、一番気を引き締めて臨むべきは設営作業」という教えのもと、入念なチェックを行い、チーム一丸となって真剣に取り組んでいた。



図3 制作編のワークショップの様子

5. 展覧会

リサーチ・企画編、制作編を経て、ようやく活動の集大成となる展覧会を迎える。完成した作品の展示にとどまらず、ICT 技術を用いた来場者参加型のライブパフォーマンスを行った「演劇分野」の作品もあった。これは、海岸や源平合戦ゆかりの地（高松市）、復元塩田施設（宇多津町）など、海にまつわる場所と展覧会場とをオンラインでつなぎ、来場者とのコミュニケーションを通して、自分たちがリサーチ・企画編で学んだことをベースとして来場者に海への理解を深めてもらうことを目的とした作品である。屋外でのリアルタイムのパフォーマンスの試みは、寒波の襲来での強い海風をはじめとした天候に翻弄され、思惑通りに行かないこともあったが、屋内での中継に切り替えるなどの対応を取り、無事終演を迎えた。

また、東京藝術大学大学美術館（東京都台東区）と展覧会会場である瀬戸内海歴史民俗資料館（高松市亀水町）とを同じシステムでつなぎ、双方の来場者がモニター越しにリアルタイムでコミュニケーションを取ることができるイベントもあわせて開催した。

展覧会は1か月間の開催で、幅広い年齢の方にお越しいただき、中高生とアーティストと一緒に創り上げた作品を楽しんでいただいた。

6. さいごに

平成 13 年度から続く香川県と東京藝術大学との関係性は、東京藝術大学としても自治体との連携で最も古い歴史となっており、これまでに、小豆島をはじめとした県内各所で現代美術の作品制作・展示やワークショップを展開し、これを継続させてきた。本県としては、瀬戸内国際芸術祭など「アート県」としての魅力ある事業を展開しながら、本年の瀬戸内海国立公園指定 90 周年を契機として、さらに瀬戸内海との関わりを歴史・文化・アートの面から深めた事業を推進したいと考えている。将来地元で活躍する芸術家育成の一助となるよう、引き続き本事業の充実・発展を目指していきたい。

今年度の展覧会は、「ひととうみ」をテーマに、瀬戸内海とそこで暮らす人々に焦点をあてた作品を 10 月 5 日（土）から「香川大学芸術未来研究場せとうち（高松市庵治町）」で展示する。県外の方も来県された際には、ぜひご観覧いただきたい。